

アート・コミュニケーション研究センター 研究員
北野 諒

大阪府立港南造形高等学校は公立の美術系専門高校であり、2009年度より、講演 / 連携授業などをACCと協同で展開している。2011年度は、7月に福による講演が行われた他、11月～1月にかけて、伊達と北野が連携授業を行った。本レポートでは、北野が担当した3年生の美学美術史演習の概要を紹介する。

[日時] 2012年1月12日・19日・26日（すべて木曜日） 1- 2限（8：50 - 10：40）
[場所] 大阪府立港南造形高等学校
[対象] 3年生「美学美術史演習」受講者10名
[講師] 和田周子（同演習担当教諭）
北野諒（京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター 研究員）

[カリキュラム]

1/12 ACOPイントロダクション・作品鑑賞
1/19 手紙のワークショップ・作品鑑賞
1/26 「聞く」ワークショップ

＊

本授業では、全3回を通して対話型鑑賞（ACOP）を体験し、主体的に作品を解釈する鑑賞への導入とすることを目的としている。回数の制限もあり、複数の作品を鑑賞してみ方を深め、学生自身がナビゲーションを実践するという段階までは展開できなかった。しかし、最小限のイントロダクションで、ACOPのエッセンスをどのように伝えられるか / 学習者はそれをどのように活用できるか、という点を考えさせられる機会となった。

1/12

まずは自己紹介など、簡単なアイスブレイクののち、ACOPの概要の説明を行った。この際、ACOP実践動画をプロジェクションし、それについて意見を交わす、という形式（つまり「ACOPのACOP」という形式）をとった。言葉で一方通行的にACOPの要素を解説するのではなく、各々が「ACOPとは何か」について自ら言語化する（またその作業自体がACOP的である）という効果が得られたと思う。その後、ACOP実践動画で用いられていた作品画像（カラカラ帝）と、もう一つの写真作品を鑑賞し、第一日目は終了した。

1/19

作品から見えたもの、考えたこと、またその根拠を言語化するという作業を、発話とは別の方法（筆記）で行う「手紙のワークショップ」を実施した。ゴッホの『靴』を対象に、「作品を見たことのない人に宛てて、手紙で作品を説明する」というシチュエーションのもと、20分間の筆記を行った。その後、各々の手紙を交換し、読み比べることで、同じ作品を対象にしても全く違う解釈が生まれることを示唆した。ゴッホの靴を引き続き全員で鑑賞、加えて上田薫の『生たまごB』を鑑賞した。

1/26

最終日は、これまでの内容を踏まえ、対話型鑑賞においては「作品鑑賞」とどまらず、そこでおきているコミュニケーション、つまり「人」が重要な要素であることを伝えた。そこから、伊達考案のワークショップ「聞く・応答する」* を行い、作品に関しても、また人とのコミュニケーションにおいても、つねに複数の可能性が開かれていることを体験的に実感してもらい、一連のカリキュラムの結びとした。

* グループで会話を行うワークショップ。その際、相手の発言の真意を「あなたが言ったのは～～こういうことですね？」と確認を逐一とることがルールとして課せられる。

ACOPにおいて基本となる「人前で自ら挙手し、自分の意見を言う」という活動は、特に日本の学校環境で育ってきた学生にとっては、それ自体かなりハードルの高いものである。短い時間の中で、どこまで自発的な発言や、鑑賞の深まりを引き出せるか懸念があったが、今回のカリキュラムでも、やはり挙手 / 発言という積極的な活動を充分には引き出せなかったように思う。

一方で、手紙や「聞く」ワークショップなどの場面においては、自発的な盛り上がりが見られた。また、ワークショップの流れでそのまま鑑賞に移った際に、必ずしも挙手 / 発言という流れではなく、自然に隣同士での会話が生まれ、そこから鑑賞が深まる、という場面も見られた。少人数であることもうまく作用したのかもしれない。会話 / ディスカッションの緩やかな形式で作品を鑑賞するという方法が有効に機能していたようだ。

最後に、生徒の感想をいくつか参照してみよう。手紙のワークでは、根拠を示したり、複数の可能性を考えてみたりといった洞察は充分に行われていなかった一方、授業内での発言や、最終のレポートを鑑みるに、対話型鑑賞で作品をみるということ、あるいは今回の授業がどのような試みであったか、というエッセンスの部分は非常に鋭くキャッチしてもらえたようだ。例えば、

「人によって色々な意見が聞けると思うので、私が作品を作った時はぜひ、鑑賞ワークショップしてほしいです。私もその場に立ちあって、意見をきいてみたいです」

「他の人から出てくる言葉は、私との共感もあったけれど、思いもしない考えにつながる場合のほうが多かったので、自分の中で新しい感性が開いていく感じがあった」

「みんなで作品を見た感想や思ったことをたくさんの人と意見交換することで、元々自分がその作品について思ったことが、どんどん見方が変化していくのがとても不思議で楽しかったです」

「今日の授業でやったワークショップ（注：「聞く」ワークショップ）もACOPのナビゲーターがやっている”言い換え”の作業と同じ作業だと感じました」

「ACOPをやっていると、自己紹介のようにも聞こえます。自分の思っていることを、素直に発揮できていて、自然と相手の思いが伝わり、そこから共感したり、反論したりして、またコミュニケーションが深まると思います」

「コミュニケーションというものは、完全模範解答をだしあうことではないことを実感することができました」

などといった感想が挙げられる。作品をみるということ、さらにはコミュニケーションとは一体何なのか、という問いが生まれていることがうかがえる。また、作品を「作る側」から（というのも参加した生徒の大半は何らかの創作活動を行っているので）、「作品をみる」ということをどう捉えるか、という意見が出てきていたのは興味深かった。

作品の鑑賞時間が充分とれなかった、という単純な物理的制約の問題のみならず、いかに自然な発言を促す環境をつくるか、いかに批判的思考を伴った観察に導くか、といった根本的な課題へのステップが、本授業では垣間みられたと思う。今回のような実践をもとに、ACOPの体系的なカリキュラム構成（あるいはACOPを展開 / 転回させるような方法）を模索していきたいと思う。

このような実践の機会は、大阪府立港南造形高等学校の和田先生をはじめとする、諸先生方のご尽力によるものである。希有な機会を与えていただいたことに感謝しつつ、ひきつづきより発展的な連携を継続できれば幸いである。

大阪府立港南造形高等学校 和田周子教諭によるコメント

本校では既に、2008年に2年生の「美学美術史演習」でACOPを、本校生に合うようなスタイルへと独自にアレンジしながら行っており、更に2009年からは伊達先生をお招きして、本格的に連携授業を試みていました。そして、今年、試みの3年目にあたって、新設した3年生の「美学美術史演習」でも、ACOP的なプログラムを入れたいとご相談したところ、北野先生のご協力により実現することができました。

3年生ともなると、制作者としては作品に対峙することに慣れている生徒たちですが、他人の作品やそれを作っている「人」、それを鑑賞する「人」に対する興味や関心がなかなか及ばず、以前から問題を感じていました。それを補完するのに、このプログラムの持つ柔軟さ、豊かな可能性が有効なのは、2年生の3年間の試みで十二分に体感できていましたが、一方で既に一価値観を固めつつある卒業学年にどう働くのかという不安がありました。しかし、こうした心配は全て杞憂でした。生徒たちは私が想像したよりも早く楽しみ、楽しみ、また問題を発見し、考え、苦しんでくれました。本校生ならば、少ない回数でも、十分に効果的な方法があることがわかり嬉しく感じています。今後も同じような機会が設けられたらと考えています。是非、ご協力お願いいたします。